白梅学園大学・短期大学図書館報

花みづき

第31号／2017.4.1
白梅学園大学・短期大学図書館
小平市小川町1-830 TEL042-346-5626

疎開（そかいほいく）保育の聞き書き

白梅学園大学・短期大学図書館 館長
子ども学部 子ども学科 教授　近藤 幹生

川上よし先生は、1916(大正5)年生まれである。東洋英和女学校幼稚園師範科（現、学校法人東洋英和女学院）で学び、都内の亀戸愛清館セツルメントへ就職する。おりしも第二次世界大戦末期で、米軍機による日本本土への空襲が繰り返される日々であった。すでに都内の小学校では、埼玉県や群馬県などへ学童疎開が始まっていた。園での幼児たちの保育をどうしたらよいのか。「死なばもろとも」だと、親たちと一緒に東京へ残すべきだという声が強かった。だが、子どもたちだけでも助けたいと、幼児・学童18名を連れて疎開が決定された。疎開先が長野県軽井沢で、川上先生が長野県佐久市出身で責務を背負うことになったのである。

それにしても、20代の若い保育者にとって、疎開保育の経験は、どのようなお気持ちであったのだろうか。想像することも難しいが、先生ご自身の言葉により紹介しておきたい。

「子どもたちは、東京の大学の夏季寮『沓掛学荘』で生活しながら追分の国民学校へ通った。幼い子どもにとっては親と離れて暮らす心細さに加え、空腹や冬の寒さに耐える厳しい軽井沢の生活。翌二十年三月、東京大空襲で子どもたちは全員家を失った。両親を亡くした子もいた。しかし疎開によって子どもたちの命は守られた」「一人息子のきよし君は遊ぶときも両親からの手紙を離さず、『先生もう一度読んで』と私の所に来ます。読んでやったある日、『先生おうちからの手紙、悲しいことは一つも書いてないのに、何度読んでもらっても涙が出ちゃうよ』。私も『そうお！』と答えるのが精一杯でした」（『写真集信州子どもの20世紀』より）[1]。

戦後、川上先生は、家を失った子たちのために、材料やお金の工面をし、軽井沢で追分学荘を建設していく。それが、児童養護施設「軽井沢学園」として引き継がれていったのである。

その後、川上先生は長野県南佐久郡川上村で生活をし、千曲川源流の村で、農業と幼い子どもたちのための民間保育事業に尽力する。私事になるが、村において保育の職探しから生活へのさまざまな導きを受けることになる。保育者としての浅い経験から弱音を吐いては先生宅を訪問し、疎開保育の日々を回想される話に耳をかたむけ、気がつくと疎開保育の聞き書きをはじめていた。先生は、「疎開は二度としないでほしい。世界に争いがたえないでしょ、平和でなくては・・」を繰りかえされた。

また、東洋英和時代のテキスト、フレーベル著『人の教育』[2]を開きながら、「人間と自然とは共に神から出で、神に依って規定され、神の中に生存するということを教育、教授、教訓に依って人々に明かに意識させ」「人間発達の、先きの階段即ち幼児期は、生きるために生きること、内界を外界に表現することを主とする時期」などと、何度も読みながら話されていた。クリスチャンである先生は「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きくその道は広い。そこから入る者が多い。命に至る門は狭く道は細い」という聖書の言葉を引きながら、「保育の道は、苦労されるでしょう。でも、保育は何歳になってもできます」「視野を広く持つことです。千曲川もロンドンのテムズ川とつながっているのです」と励ましていただいた。

2016年12月、川上よし先生は、百歳の生涯を終えて、あの世へ旅立たれた。心より冥福を祈りたい。戦前の疎開保育のみならず、保育・幼児教育の苦難の歴史を学び深めたい。2017年5月3日、日本国憲法が施行され70年を迎える。平和の尊さと人間の尊厳について考え続けていきたい。

1 信濃毎日新聞社『写真集信州子どもの20世紀』（2000年12月）P214-217
2 フレーベル『人の教育』イデア書院（1930年5月）P5　P107

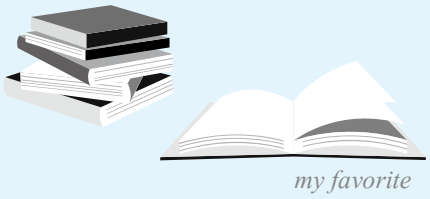
本を読みはじめるとき

子ども学部　発達臨床学科 准教授
鬼頭 七美

小学４年生になる息子に、乳幼児の頃からたくさんの絵本を読み聞かせしてきた。谷川俊太郎の『んぐまーま』や『ぽぱーぺぽぴぱっぷ』などの、明確な言葉とは言えないような言葉にならない文字の羅列だけの絵本を、面白おかしく抑揚をつけたり、宇宙人のセリフを想定してみたりしながら、自分自身も様々に楽しみながら読んだ。定番の『おおかみと七匹のこやぎ』や『三匹のこぶた』などの絵本は、登場する動物の一匹を息子の名前に置き換えて読んだりした。こうして読み聞かせをしてもらう癖がついた息子は、その後、本をちっとも自分から読まず、常に「よんで～」とせがむばかりとなってしまった。そんな息子が、ようやく最近、読書熱に火がつき、自分から本を手に取って読むようになった。

夢中になってむさぼるように本を読みふける息子の姿を見て、ふと、自分はどうだっただろうと思い返してみた。そう言えば子どもの頃、本を読むのを面倒に思い、なかなか本に手が伸びない時期があった。それが、なぜ本を読むことを仕事とするようになったのだろう。高校生くらいまでよくマンガを読んでいた記憶がある。その一方で、中学校でも高校でも、何の本か忘れたが図書館の本をよく借りていたという記憶もある。最も鮮明に覚えているのは、文庫本を自分で読むようになった高校生のとき、太宰治の『人間失格』にはまったことだ。このことをキッカケとして、大学では文学を専攻したいと思った。念願の文学部に入学したあと、村上春樹を読んでいないことを恥じるようになり、慌てて読んだこともあった。徐々に、本は面白いが忍耐力がいるということも分かってきた。こんな私は、今では文学史では学ばないような明治時代のエンタメ小説を読むことを仕事としている。

本との出会いは、いつ訪れるか分からない。どのように出会うのかも人によって違う。みなさんも自分にとってのかけがえのない一冊を探しに、図書館に足を運んでみてはいかがだろう。



ことばと向き合う

2017年3月保育科卒業生　源ゼミナール代表
星山 由布

本を読むということは、ことばと向き合うことだと思います。書き手が伝えようとすることを読み手はそこに綴られたことばをたどって受け取ります。

ことばの受け取り方は人それぞれで、ひとつのことば、ひとつの文からいろいろな解釈ができることもあります。ときには、書き手が意図しないような解釈を読み手がすることもあります。読み手として書き手の伝えたいことを読み取る力、書き手として伝えたいことを読み手に伝える力は、実際に読んだり書いたりすることで磨かれていきます。ところで、この二つの力はことばと向き合うことに他なりません。

私たち源ゼミは保育の「記録」について研究を行いました。研究は、「記録の歴史と時代背景」「記録の種類」「記録の実際」という三つの視点で進め、必要な資料を図書館や論文検索等で探し考察を行いました。白梅に所蔵されている資料だけでは限界もありましたが、保育の「記録」の歴史は「指導計画」から始まったこと、日々の子どもの姿をどう捉え、記録するかは現場の保育者に委ねられているところが大きいこと、様々な記録方法が存在すること、そして、そもそも保育の「記録」に関する研究がほとんど手つかずのままであることがわかりました。しかし、研究を通して保育者は子どもの姿を読み手に伝えるために、文章力や表現力が求められる、つまり、保育者は読み手としての姿も、書き手としての姿も求められるのではないかと考えました。なぜなら、読み手として園内の文書や絵本、紙芝居、連絡帳などを読み、そこに綴られたことばを受け取るからです。

隠れ家

子ども学部　家族･地域支援学科 講師
午頭 潤子

白梅学園短期大学に在学中、図書館と言えばちょっとした隠れ家のような存在でした。

元々、私自身、読書が特段好きな訳でもなく、しかし図書館の静まり返った空気は緊張感を感じつつも時に切なく、安心する場でした。

短大生時代の趣味は音楽ということもあり、図書館で一番利用させて頂いたエリアは「視聴覚室」でした。(現在も図書館の入口直ぐ右手にあります。)

そこには沢山の映画や音楽等の視聴環境が整っており、まさに貸切りの映画館の様で、行き場に困る授業の空き時間などに気軽に立ち寄れる居場所。図書館の性質上、一人でいても問われることはなく、本を読むだけではなく、ただフロアを歩くだけでも自分の知らない世界観を感じられ、楽しめるそんな隠れ家でした。

とは言え、図書館と言えばレポートや論文作成のために通う所。私自身もレポート提出前には「介護福祉」関連の文献エリアに必死でかじりついた事もあります。また、大学院進学後は、介護福祉・社会福祉の現場で感じた疑問を解消すべく図書館に通った日々もありました。一日中論文を読んだり、データの分析をしたり、煮詰まると図書館を歩き回る事もありました。そんな私たち学生を図書館の職員は温かい目で見守ってくれていたように思います。

ある日ニュースで取り上げられていた鎌倉市図書館の Twitter（2015 年 8 月 26 日発信）を見ました。「もうすぐ二学期。学校が始まるのが死ぬほどつらい子は、学校を休んで図書館へいらっしゃい。マンガもライトノベルもあるよ。一日いても誰も何も言わないよ。9 月から学校へ行くくらいなら死んじゃおうと思ったら、逃げ場所に図書館も思い出してね。」[1] という投稿でした。

小中高生のみならず、大学生・社会人・高齢者等のどの世代にも通ずる言葉のような気がしました。そして保育・福祉職や教職を目指す本学の学生にも、発信できる言葉であってほしいと思いました。

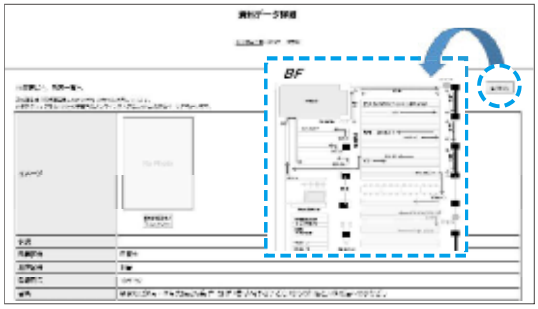
図書館にはこれからも、そのような時にこそ誰にでも開かれた 「居場所」であってほしいと思います。

1 URL: https://twitter.com/kamakura_tosyok/status/636329967668695040?lang=ja （アクセス日 2017 年 2 月 9 日）

そして、書き手として保育の記録やお便り、連絡帳などで、ことばを通して子どもの姿を伝えるからです。

私は、これから保育者としての道を歩みます。読み手として、保護者からのことばをどのように受け取り寄り添っていくのか、絵本や紙芝居という物語の世界をどのように子どもたちに伝えていくのか、また、書き手として、どのように子どもを捉え記録していくのか、そしてことばを通してどのように保護者に伝えていくのか、求められる力は大きいです。だからこそ、保育者として自らのことばに責任を持たなくてはなりません。ことばは、そのつかい方で人に力を与えることも奪うこともできます。そのことを心に留め、日々自分のことばと向き合いながら子どもたちにかかわっていきたいと思います。

図書館からのお知らせ



資料検索の資料データ詳細画面で、「配架図」が表示されるようになりました。(2016年10月)
検索した資料が図書館内のどこにあるか分かりますので、是非ご利用ください。

<利用手順>

① 「白梅の資料を探す」で資料を検索
② 検索結果一覧画面より、書名をクリックして資料データ詳細画面へ
③ 画面右上「配架図」ボタンをクリックすると、色つきで配架場所を表示

うちがわはそとがわよりも おおきいんだよ

2017年3月子ども学研究科修士課程修了
4月子ども学研究科博士課程進学
向山 陽子

鷹の台に住んで20年近くになるのに、満員電車に乗って職場までの往復の日々・・・

当時、某幼稚園で子どもたち、保護者たち、地域の方々との充実した日々を過ごしながら、大きな時代の変化を体感していました。還暦をとっくに過ぎ、今まで是として来た自分の保育観の根幹を改めて捉え直したくなっていました。

そして、往復 3 時間弱の通勤時間がしんどくなった頃、踏み切りの向うの緑道の先に、保育・福祉界の御歴々が代々築かれた白梅学園大学が、その先には武蔵野美術大学があるなあ、と思うようになり・・・この三年、春夏秋冬の玉川上水緑道を思考しながらmy学び舎my図書館に通う日々を満喫しています。花の名も鳥の名も覚えられないけれど、歩を止めて季節の変化に体を委ね、再び思考しながら歩を進める時間は、細胞の一つ一つが喜ぶ、嬉しく贅沢な時間です。

「公園の歴史」の資料を求めたあの日から白梅学園大学・短期大学図書館がmy図書館になりました。薄暗い書庫の中で「1 冊」に出会えた時の何とも言えない感覚、そこから次の 1 冊が繋がり、蓄積された知の泉に踏み込む緊張感と充実感を知りました。さらに広がる興味関心を、書に込められた先達のエネルギーに辿る面白さにはまりました。

白梅学園大学・短期大学図書館が有り難いのは、全蔵書が「子ども」と繋がっている事と職員の方々の心持ちです。私にとって安心安定できる場所となっている所以です。感謝！

絵本と夫の蔵書が一杯の我が家も大好きですが、大気の中をmy図書館に通う贅沢を今後も存分に味わおうと思っています。

芽吹きの春、未知への憧れとともに記す。

●●●図書貸出ベスト 10●●●
（2016／1／1～2016／12／31）

順位	回数	書名
1 位	47 回	どうぞのいす
2 位	44 回	おおきなかぶ ロシア民話
3 位	35 回	はらぺこあおむし
4 位	33 回	てぶくろ ウクライナ民話
5 位	30 回	ぐるんぱのようちえん
6 位	29 回	ぐりとぐら
7 位	27 回	施設で育った子どもたちの語り
8 位	20 回	たんぽぽのうたがきこえる
9 位	19 回	わたしのワンピース
10位	18 回	子どもが語る施設の暮らし 2

絵本「どうぞのいす」が47回と、昨年(48回)と同様に一番多い貸出となりました。その他にも絵本が多くランクイン。2015年に図書館の絵本が1万冊を超えました。様々なジャンルの絵本をぜひご利用ください。

●●●ビデオ･DVD 閲覧ベスト 10●●●
（2016／1／1～2016／12／31）

順位	回数	書名
1 位	70 回	リトル・マーメイド
2 位	66 回	アラジン
3 位	52 回	着信アリ 2
4 位	42 回	保育士になるためのつまずきのある子への保育(重症心身障害児施設・肢体不自由児施設)
5 位	39 回	塔の上のラプンツェル
6 位	37 回	アナと雪の女王
6 位	37 回	着信アリ Final
8 位	30 回	レ・ミゼラブル
9 位	25 回	耳をすませば
10 位	24 回	(持ち込み資料)、眠れる森の美女 カールじいさんの空飛ぶ家

例年同様、「リトル・マーメイド」などアニメが人気でした。「保育士になるためのつまずきのある子への保育」は、重症心身障害児のための通所施設を紹介したものです。この他にも保育・教育に関するＤＶＤがありますので、ぜひご覧ください。

花みづきについてのご意見・ご感想を図書館までお寄せください。E-mail：library@shiraume.ac.jp